

901
102
109

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁹ 1 2 3 4 5

始



50/109



雜

誌

北

原

白

煤

著

著

ARS

大正

10 7. 28

内交

はしがき

この洗心雑話は大正六年の十一月から七年の十月にかけて、短歌雑誌の「珊瑚礁」に書いたものであつて、その雑誌が出なくなつたので、私もしぜん筆を擱いて了つた。初めからただつれづれに思ひ出すままに毎月書いておくつたのであるから、これといふ筋も無ければ長くも短くもなつてゐる。今度本にするので、今すこしく順序を正して、章毎の

區別もはつきりさせて置きたいとは思つたが、もとより隨筆風のものだし、さうなると却つて書いた當時の氣持をこわして了ふので、ただ心の動いたまま筆の動いたままにその跡をとどめて置く事にした。で、その一その二といふひとつひとつのくぎりも、その月々書いただけのものをその儘にして置いたままで、その中では續いてまとまつたものもあれば全く違つた幾つかの話も這入つてゐる。

何れにしても、わかりやすい、誰にも解きやすい言葉で、ただやさしく書いて見たいと思つたが、まだ言葉がいくらか

六つかしくなつたかも知れぬ。六つかしいものをやさしい言葉で説きわけると云ふ事はそれこそ何より六つかしい事である。アッシジの聖フランシスがどういふ言葉で雀たちに説いて聽かしたかといふ事をしみじみと考へる。世の中のいろいろなことは六つかしく見ればかぎりが無いが、そのじつ、ごくごくつきつめたところにゆくとやさしいたつた一言でも云へるものである。それよりか何にもわからなくなるので、やはり私も何にもこれと云つて知つてるといふものは一つも無いのである。そこに人の智慧

の及びもつかぬ神の御法がある。それを思ふと頭がしげんとさがつてくる。

で私のかうした雑話も考へると面が赤くなるだけのもののであるが、いくらかでも心にとまつたものや歌についてのいろいろな苦しい経験の上から身におぼえのある事だけを、何ひとつ知り得ぬなりに、とにかく筆にとめて置いたといふまでである。それでもいくらか何かの心のたしにしてくださる方があれば、これよりありがたい事はない。それから歌の雑誌に書いたのであるから、この中には歌

といふ言葉がずいぶんと出てくる。然し、これはある特別な場合のほかは、もつと広い意味での詩といふ事に見做してほしいのである。それに、この中には詩や歌そのものの話と云ふよりも、もつと大切な詩や歌をつくるだけの心の据え方、感じ方、物の見方といふ方に重きを置いてお話ししてある。それはよく初めに知つていただきたいのである。かういふ話は折さへあれば、もつと書いて見たいと思つてゐる。書いて見ようと思ふとまだいくらもあるやうな氣もする。

六
とにかく、この本はかういふ風に、書いた時のままにして
出すといふ事なら、もつと二三年前に出してもよかつたの
であつた。これはいつも何かをまとめるのに無精な、いつ
も書きはなしのくせから、かうなつて了つた。

大正十年七月

小田原にて

白秋しるす

目次

その一	一
その二	一五
その三	二七
その四	四一
その五	五一
その六	七一
その七	八三

わかりやすい言葉で
わかりやすいやうに

目次(終)

その八	二
その九	一一五
その十	一三七
	一五五



Ms 1 .



抒情の歌は、自分じしんの息のしぜんと心の底からあふれ出るやうに歌ひたいものである。

ヴェルレエヌの詩などはさういふものであると云ふ。

それは容易いやうで、なかなかさうゆくものではない。ヴェルレエヌの草稿を見れば、殆ど字も何も眞黒になつてあるさうである。初めに書いた文字などは殆ど跡かたも無いほどに消されて、まるで別な新らしいものになつてゐる。

ると云ふ。それが自然と自分の息づかひとおんなじになつてゐる。

四

技巧を猥りに卑しむ人は考へねばならぬ事である。

はじめから、何の無理もなしに言葉が息づかひその儘にながれ出る事がある。それは天品である。それなら云ふところは無い。が、大概の場合は言葉が勝つ。言葉といふより歌を詠まうとする間際の私心が、その息づかひを不自

然にするのである。さうなると人柄の問題である。私達が句を練り調を練る苦勞はさうした私心を去り、色つやの多い言葉の文を消せるだけ消して、しぜんの心もちとおんなじになるやうにするのである。これは手細工をするのでは無い。

それでも、なかなか思ふやうにゆくものではない。だから苦しむのである。涙がこぼれるのである。ヴェルレーヌの詩などは誰が見てもはじめから自然に流れ出たやう

五

に見えるさうである。練りに練つたその跡が少しも見えない。さうならなければうそである。そこまで行つたヴェルレエ又は偉いと云はなければならぬ。誰しもさうはゆけないのである。

私どもの歌が時として技巧が過ぎるやうに見える事があるとするならば、それは過ぎたのではなくて、未いたらないのである。まだまだ言葉の色や匂におもねり過ぎるのである。まだまだ身の垢心の垢を振り落せないのである。

歌は弄ぶべきものにあらず、弄ばれるものなりと景樹が云つたといふ、その言葉はまことにしみじみとうなづかせる。全く歌を思ふと頭が下らずにゐられなくなる。眩くて忝くて恐れ入つて了ふ。それ位に歌は尊く、それくらゐに私達は歌の爲めに苦しめられ、呵責まれ、こづき廻はされてゐる。弄ぶどころで無いのである。歌の後光は手に觸れがたい。私心を去り、静に掌を合して、初めてその光を浴びる事である。苦しんでいよいよ猥らな言葉が文を消し

てゆく事である。心と歌と一つになる事である。尊く、さ
うして光り輝くものになる事である。

*

これは支那のお話であるが、昔、長安に、ある一人の風流才子がゐた。見てはならぬ高貴な美しい姫宮を垣間見たが爲めに兩つの眼が兩つとも一時に明りを失つて了つた。見たら盲目になるぞよと戒められてもどうしても、覗かずにはゐられなかつたのである。彼は半年餘りといふもの

は全く氣違のやうに狂つてゐた。悲しんだ。泣きもした。祈りもした。しても眼は開かぬ。世の中は眞暗であつた。日が経ち、月が経つと、それでも幾らか心が落ちついて來たが、陰鬱した何とも云ひ知れぬ頼りなさが、しぜん、彼を、いこちな寂しい人にして行つた。何といふ味氣なさかと思はれた。盲人はただひとり坐つてゐた。人にも逢はず、世間の噂も聞かず、まして時候の變移などは知らうよしもなく、ただぼつねんとひとり密室の中に閉ぢ籠つてゐるうちに、その身は見るかげもなく瘦せはてて了つた。人からも

忘れられて了つた。それでも盲人は靜かに坐つてゐた。眼にこそ観ないが神氣は次等に澄んで来る。耳は澄む。今はいかなる幽かな音までも聴かずともきこえて来る。悲みが極まつて謙遜つた信のこころが生れて來たのである。諦らめはてて却て悟りの道がひらけて來たのである。盲人はいよいよ閑寂の三昧に入つた。

と不意とある時、盲ひた暗い兩つの眼の中で話聲がする。そして小さな隧道でも穿つやうな音がする。不思議だと思つて、いよいよ耳を傾ぶけると今までは氣が付かなかつ

たが、兩つの眼の中に膜を隔てて兩つの小さな蟲が住んでゐたのである。蟲は眼の中があまりに暗くて寂しいから、隔ての膜にいつとなく孔を開けて往き來しだした。ある温かな日のことであつたが、一方の蟲が眼の中から鼻へ抜けて、もぞもぞしたかと思ふと右の鼻孔からふうと飛び出した。何處へ行つたか一二時間経つとやつと歸つて來て、またもぞもぞと同じ鼻孔から潜ると、やがてして、暗い眼の中で話聲がして、白木蓮の花が咲いたぞと云つてゐる。それを聴いて盲人は初めて春が來たのだなと氣がついた。

彼の屋の前に一本の木蓮の大木があつた。毎年春が來るとこぼるるばかりに清しい白い花をつけるその木蓮は彼の自慢の名木であつた。盲目になつてから時節も知らずうき世の便りも聞くすべが無かつたがいよいよ今年も白木蓮の花が咲いたと聽いて、すくなからず驚くとともに、長い間の暗く悲しかつた自分の過ぎ來し方をふりかへつて、思はずはらはらと落涙したと云ふ。

この話は人ごとで無い。今の私にはこの盲人の悲しみ

や忍従の心持がよくわかる。いな、私こそ忝い美しいものを仰ぎ見て眞つ暗になつた盲人ではないか。目は盲ひてもさういふ機縁に觸れ得た事は尋常ではない。それは選ばれた身の果報である。ただ悲しい事には、まだ私は私を去つて天に則るほどの大きな悟りが開けない。まだまだ忍従の徳が足りない。まだまだ自分の眼の中にある小さな蟲の話聲さへ靜かに聽き澄ますだけの虚心にも住し得ない。澄みつつはあるが未だもろもろの雜念を追ひ拂ふよすがもない。これを思へば、寂の中に寂びはてた芭蕉の

一生は思うても難有いものであつた。

おお私は盲人の話のつづきを書くことを忘れた。

その後、眼の中の小さい蟲は、自分の棲家の暗さにほとほと堪へられなくなつた。そこで今度は内から外へ向けて、いよいよ兩つの眼の外膜に、一つづつ小さな孔を穿ちはじめた。するうちに、兩の眼に小さな二つの孔が開いた。

盲人の眼は開いたのである。



NO. 11.

しぜんと頭のさがるやうな歌しぜんと涙のこぼれ落ち
るやうな歌さういふ歌こそ私達の求めるものだ。面白い
と云はれるうちはまだ浅い。耻かしい事である。耻とす
可き事である。

歌に理屈は無い。いい歌ほんたうにいい歌は理も非も
なく人に頭をさげさせずにはおかぬ。忝い、それは言語を
絶えた境に私達を引ずり込む。どうにもならなくさせる。
さういふ歌こそほんたうの歌だ。歌の妙はそこにある。

しぜんと頭のさがるやうな歌はしぜんと頭をさげた心から生れる。しぜんと涙のこぼるる心から生れる。

*

あらゆるものに深く頭をさげる心が先づ第一である。あらゆる物のあはれを識る心が先づ大切である。勿體なさが先きに立つてこそ頭はさがる。物のいのちをあはれむ心が凝つてこそ涙はこぼれ落ちる。謙遜と愛の心、この

心から初めて祈禱の言葉が溢れいで、隨喜の涙がこぼれ落ちるのである。「何ごとのおはしますかは知らねども」である。「何の木の花とも知れず匂ひかな」である。

*

昔から詩歌の聖と云はれた人たちは皆おとなしく頭をさげた人たちであつた。廣大な自然何ごとかおはしますその神ごゝろの前に常に謹慎の袂をかきあはせた。さうして掌をあはせ涙をながした。

聖心たじろしんのかたじけなさ。

*

聖心たじろしん、それは神かみの心こころである、佛ほとけの心こころである。

この聖心たじろしん。

聖心たじろしんは世よの森羅萬象しんらばんしやうに満みちあふれてゐる。深くかくれ

ひそんでゐる。空そらにも、木きにも、草くさにも、人ひとにも、鳥獸とりけものにもある。火ひにも、水みづにも、土つちにも。或あるひは蟲むしけら、病やまひの菌きん、さては目めにこそ見えぬが、徴かぎにも、アミイバアにもある。それは凡すべての命いのちの源みなもとである。愛あいの源みなもと、祈いのちりの心こころの源みなもとである。

それはまた、深ふかい悲かなしみの源みなもとであり、大おほきな歡よろこびの源みなもとである。智慧ちゑの源みなもと、歌うたの源みなもと、命いのちの奥おくの命いのちである。

*

聖心は誰にもあるが聖心を忘れてゐる。忘れてゐるよ
り知らずにゐる。知つても何かに暈まされて、我から地獄
の底に墜ちこんでゆく。おお、地獄、地獄の底にも聖心はあ
る。聖の心は消えやらずに常に木の芽かやの芽のやうに
光つてゐる。命のながれは限り知られぬ。

*

トルストイの『戦争と平和』を讀んだ人は知つてゐる筈だ。
あの若いバルコンスキイ公爵が敵弾にたふれて、まさに息

絶えんとする時、何らの邪念もなく、たゞ惚れぼれと子供の
やうに眺め入つたあの蒼空の色、蒼空の微笑、おおその聖心。

*

聖心の忝なさ、聖心の現れの美しさ。知らずば空を仰い
だがよい。澄みわたつた水の面、小兒の瞳に見入るがよい。
鳥の羽ばたき、纏れあふ蝶の交み、さらさらと降りつもる雪
のささやき、草の葉ずれを聞いたがよい。薔薇の木に紅い
薔薇の花が咲き、林檎には林檎が熟る。おお、その薔薇をさ

くさく嚙んだがよい。鮮かな野菜、穩かな蠟燭の火、落ちゆく枯葉、消えてゆくもの、光るもの、飛び、歎き、動く煙となりゆくもの、皆聖心の現れならぬものは一つもない。おお、さうしてあらゆるこの世に滴りそそぐものは明るい大日の輝きである。

二四

*

あな尊と青葉若葉の日の光
あな尊とよと禮拜むだ芭蕉頭をさげた芭蕉、この大自然

の光の前にひれ伏す心、その心は既に聖である。同じ聖の心である。

*

再び云ふ。聖人は歌の心の源である。

Ms. III.



聖心は童の心である。

*

越後の良寛禪師はことにこの童心の持主であつた。かういふお話がある。

一に童男童女、二に手毬、三におはじき、これが禪師の三好といふ。これで見ても良寛様がどんなに子供が好きで子供たちと遊ぶ事がまたどんなにうれしかつたか、思つても

ほればれする。

その良寛様も子供たちには随分莫迦にされて、盛んに愚弄られたり擲揄れたりしたらしい。それにも拘らず平氣で一生懸命に遊び惚れてゐた良寛様が難有い。

*

ある時例の通り、子供たちとかくれんぼをしてゐられた。鬼になつた良寛様が目を瞑つて、もういいよといふ可哀い

い聲を一心に待ち受けてゐられる。と恰度日のくれどきで子供心の何がな欲しくなる時である。家々の燈がチラチラ点き出すと子供たちは急に遊びをやめて一人のこらず、こそこそと歸つて了つた。そこは子供だから良寛様も何もうつちやかしかしである。むろん、いくら待つてももういいよといふものはない。そのうちに日が暮れ長い夜が來た。さうしてたうとう夜が明けて了つた。良寛様はそれでも一生懸命だ。心から目を瞑つて、やはり同じ處に同じ姿した儘、もういいよと子供が呼ぶのを待つてゐられた。

その心の素直さ、さうしてその誠の篤さ、正直さ。

*

それから、またある時のことである。良寛様が今度はか
くれる事になつた。そこで見つけられては、大變だといふ
ので、さつそく田圃の稻むらの中にもぐり込んで、それは可
哀らしいことだ、それはそれは小さくなつて、まるで二十日
鼠見たいに頭からすつぽりと稻藁をかぶつておどおどし

てゐた。すると子供たちはまた例の通り一人のこらずこ
そこそと歸つて了つたのである。それを良寛様は少しも
御存知がない。また日が暮れて夜が来て、また夜が明けた。
稻村には霜がまつしろに置き、朝の日のぼり初めると、百
姓がやつて来て、何の氣もなく稻たばをやにははづすと、
おやつと驚いた。良寛様が小さくなつてもぐつてゐる。
おや、良寛様がと云ふと、慌てて、そつとしろ、そつとしろ、子供
が見つける。

その心のあどけなさ、ありがたさ。まるで子供である。

三四

*

またある日のことである。その良寛様が男の子や女の子達とおはじきをしてゐられた。沙門良寛全傳に「禪師頗ぶる大勝を博して賭物の熬豆を多く得」と書いてあるから、よほどの乗氣であつたらしい。恰度その時誰かが入つて来た。そして、おやおや良寛様なかなかあなた様はおはじきがお上手でと褒めると、罪がないこと、良寛様はぼうつと

面を赤くすると、まるでおぼこ娘見たいに、さもさも耻かしさうに、そつとその熬豆を膝の下に押しかくした。と、いふ。その心の初々しさ。そのきまりのわるさ耻しさは全く佛の前に子供らしくおとなしく身をへりくだる心である。尊い聖心は凡てこの童心を源にする。

*

禪師がいかにかに天真爛漫であつたかと云ふことをもうひとつお話する。

三五

ある時、赤々と實^みが熟^うれて鈴^{すず}なりになつた柿^{かき}の木^きの下^{した}で
 小さな子供^{こども}がひとり泣^ないてゐた。良寛^{りやうくわん}様^{さま}が通^{とほ}りかかつて
 どうしたんだと圓^{まる}い頭^{あたま}をさすつてやると、あの柿^{かき}が食^たべた
 いと云^いふ。よしよしそれではわしが取^とつてあげ、泣^なくん
 でないぞと云^いひながら、やつとこさと木^きの上^{うへ}に匍^ばひあがつ
 た。枝^{えだ}につかまつてあれかこれかと探^{さが}してゐるうちに、そ
 れは全^まくうまさうな柿^{かき}の實^みだ、一つ取^とつて口^{くち}をつけると、そ
 れがおいしいのなんの、良寛^{りやうくわん}様^{さま}は夢^む中^{ちゆう}になつて、嚙^かぢるは嚙^か

ぢるは、まるで猿^{さる}蟹^{かに}合^あ戦^{せん}の赤^{あか}いお猿^{さる}のやうにむしやむしや
 と食^たべ惚^ぼれてゐる。下^{した}にゐる子供^{こども}こそあはれである。そ
 れを見て火^ひのやうに泣^なき叫^{こゑ}ぶとはじめて良寛^{りやうくわん}様^{さま}氣^きがつい
 た。さあ、しまつたこれはといふので、慌^{あわ}てて枝^{えだ}をゆさぶつ
 た。といふお話^{はなし}。思^{おも}うてもその慌^{あわ}て方^{かた}のをかしさ、罪^{つみ}のな
 さ、眞^ま正^{しょう}直^{ちき}さ。その子供^{こども}らしさ。全^まく涙^{なみだ}がこぼれるほどう
 れしいではないか。

*

禪師の玉のやうなこの童心は榮藏と云つた童のむかし
その儘である。それは何ものにも代へがたい、ふたつとな
い尊い天稟である。

まだ、榮坊が八歳か九歳の頃だつたといふ。ある日父親
からひどく叩れたのでつい上目をした。そこでまたまた
叩れた。親を睨むやうな奴は、鉢になるぞ。これを聞いた
良寛様の榮坊は外へ出て行つたが日が暮れても歸つて來
ない。さあ、家内中大心配で、あちらこちらと捜し索めると、

ある濱邊の岩の上に、悄然と佇ずんで沖の方ばかり眺めて
居た。榮坊、どうしたと云ふと、榮坊曰く、俺まだ鉢にならね
いか。

鉢になると云はれたのでほんとに鉢になると思つて、一
心に海を凝視めてふるへて居た童心の正直さ。これをこ
そ生一本といふのであらう。童を欺く大人こそ禍である。

*

その四・



聖心ホリココロはこの童心わらわココロを源みなもととする。

遊びをせむとやうまれけむ

たはぶれせむとやうまれけむ。

遊ぶ子どもの聲きけば

わが身さへこそゆるがるれ。

梁塵秘抄りやうちんひせうのこの今様いまやうはまことに童わらべの心こころに通かようたもので
ある。全くまづた子供の遊びあそびを見てあるほど心こころの晴はれるものは
ない。子供こどもは遊ぶ遊あそんで遊あそんで遊あそび惚ほれる。子供こどもが遊ぶ
時には身みも魂たまも遊あそびにうちこんで了しまふ。それが鬼おにごつこ

にせよ。かくれんぼにせよ。心から遊び惚れてゐる子供を見てゐると、そこにはたゞ遊びそのものばかりしか見えな
い。そこには遊ぶ子供のいぢばかりが光物のやうに燃えあがるのみである。遊びの形なぞは目に入らない。全く見てゐる人の心までがうちゆらいでくる。

さうなると遊びも尊い。三昧とはこの遊びの妙境に澄み入ることである。

私心を去るがよい、眞に童のやうになつてほればれと遊びほれたがよい。畢竟するに藝術は遊びである。この童の遊びを更に深く更に高くしたものである。

*

歌をつくるほどの人は第一に歌の形を尊ぶとともに、その形の中に遊び惚れる事が大切である。私達が歌の三昧に入りきつた時、歌の形は消える。ただ私達の命だけが輝き澄んで、そこに甚深微妙のしらべを心から心にと傳へて

ゆく。何とも云ひやうのない尊さにしぜんと人の頭を垂
れさせるものだ。要するに中味である。身も魂もうち込
んでかかる事である。命がはぢきれるほど形を燬き盡し
て了ふことである。いつまでもその形だけが人の目につ
くやうな歌は下々の下品である。

四六

*

知らざるは知らずと云つゝがよい。負けたら負けたと
云ふがよい。わるかつたと氣がついたらあやまることだ。

勝たうと思つたら自分の弱點をすつかり曝け出さなけれ
ば眞に勝てないと云ふ。これは澁川流の極意だとしてあ
る。つまりは全身全靈をあげて何物にもぶつつかること
だ。これは劔道柔道に限らずあらゆる藝道の奥儀である。

*

人間がこの廣大な大自然の前に立つて、何を誇りに何
を知つたと叫べる。凡て、あらゆる私心(小我)を棄て去つた
あと、人ははじめて宇宙の眞機に觸れ得るのである。自分

四七

の弱さを心から知り得た時、人に真から強くなる。眞の自分を見出す。小さな芥子粒の一粒にすらもあらゆる大千世界の睿智が充ち溢れてゐる事を、かの婆羅門の梵の教では説いてゐる。 おお、その芥子粒。

*

深くへりくだり、博く愛くしみ、自然の前、聖心の前に頭を下げて、いつも裸でありたいものだ。いつも安らかに息したいものだ。 童のやうにおとなしく、素直に、生一本で、偽ら

ず罔かず、いつも身がるに歌ひ惚れたいものである。

*

歌の中では歌ひ惚れたがいい。自然の前には同じ心で息したがいい。見えを張つたり、抗つたり、呼號つたりするものでない。私の心を去れといふのはこの事である。い歌を作らうと思ふのはまだまだ心のいたらないのである。歌ふ時には歌ふ心だけになるものだ。はじめから後の世までも残るやうない歌を作らうとするのは、それは

五〇

あまりに歌を私するのである。私たちはとにかくするとい
い歌を作らうとする邪念が先に立つ。真にいい心境にさ
へ澄み入りさへすれば歌はおのづと流れ出る。いい歌は
その境からしぜんと生れる。それがいいものであれば望
まずとも後の世までも残るものである。要するに歌を歌
ふ時にはたゞその歌ふ心だけになることだ。少しの邪念
でもあつてはならない。



その五。

童心を深くした聖心、その聖心こそ神心佛心のあらはれ
である、言葉をかへて云へば忝い神心佛心の前におのづと
頭をさげて、その心をおのが心と爲し得た時に人はおのづ
と聖になる。世の中の大きい聖、詩歌の聖は常にこの心を
心として深く遡り、博く愛しみ、さうして事々に掌を合せた。
聖ならずとも、凡夫でも時たますると、何かのきつかけがあ
りさへすれば神心に觸れ得るのであつて、それは難有い佛
心に目が開いてくる。それは時たま、ほんのしばらくの間
でも尊い命の中の命となる。その時、その人は立派な聖で

ある。さういふ時にできた歌こそほんたうのものである。

佛家では草木皆佛性ありと云ふ。前にもお話したが、この世の中の森羅萬象はみなこの佛心神心を持たぬものは一つとして有る筈がない。さうして一つとしてこの宇宙に漲るふたつとない尊い命のあらはれならぬものはない。人とてもさうである。疑ふ人は玉のやうな童の心に觸れたがよい。

尊いこの心を識る事は尊いおのれのいのちを識る事である。人が何かの機縁に觸れて心から目が醒めて驚く時、そのいのちは光り出す。そのきつかけであるが、それは罪ふかい大人の心ではなかなかである。大人はあまりに凡てに馴れ過ぎてゐる。何物をも當りまへの事として見過ごして了ふ。それは恐ろしい冒瀆である。童の心に歸れ、童は神の愛兒である。童たちがよく川べりで、かはいいチンポコをまくつて、並んで小便する時、「神様、俺小兒だ小兒だ」と歌ふ。あれはあまりに神に甘えた言葉ではあるが、神

様は全く小兒には何事をも許していらつしやるのである。
 その玉のやうな童であつてこそ初めて神の心に觸れるこ
 とができる。童の靈は新らしい、いつもびちびちしてゐる。
 それは地面から湧きあがる甘藍の玉のやうに常にいのち
 は洗はれてゐる。生れたままである。神心のままである。
 童の觀聽き、嗅ぎ、觸れ、味ひ、心に感ずること、それらは凡て驚
 きのたねならぬはない。不可思議な何とも云へぬ美しい
 世界、その世界にいつも童は目を瞠つて驚き、歌ひ、飛び廻る。
 その童に觸れると亦ありとあらゆる空も光も草も木も石

も玉も生物もみな目の醒めたやうに光り輝いてくる。童
 は常住この水々しい驚異を驚きとして生ひたつてゆく。
 彼等の感覺は蝸牛の角のやうに鮮かであらぬ腹のやう
 に心は紅い。松脂のほひ、青栗の毬、猫柳の初毛、きりぎり
 すの髻、數へたてれば皆童のいのちならぬは無い。童のや
 うに驚く事である。その驚異がきつかけとなつて、初めて
 この世の靈驗さを識り、神心を識り、おのれの尊い、いのちの
 本體を識る。さうして詩となり、歌となるのである。

『ハツと思へ』。と曾て私が云つた事があるが、そののち人に聞くとところに據ると、それと寸分違はぬ同じ言葉が黒住教の教への中にあるさうである。それには私も驚いたが、兎に角ハツと思ふ心がたいじである。

薔薇の木に
薔薇の花咲く、

なにごとの不思議なけれど。

この私の短い詩を見て、何が面白いと云つた人が居る。あたりまへだと云ふのである。あたりまへには違ひはないが、冬の枯れすがれた薔薇の木の小腋からあの眞紅な薔薇の花が咲きひるがへる目の前の不思議さを、ただあたりまへと見る事ができようか。何でも無いといふのはあまりに靈が鈍つてゐる。私はハツと驚いたゆる涙がながれた。頭がしぜんと下つて、この世の神心の前に掌を合せてのである。林檎の實の落つる音は何でも無い、誰でもよく

聴く。然し林檎の實の落つる音にハツとした時ニユートンは初めて宇宙の引力を識つた。これが神心に通ふ機縁と云ふものである。

六〇

山路来て何やらうれしすみれぐさ

芭蕉の聖心を呼び醒ました一莖の小さい莖の花は、まさしく大自然の神心のあらはれであつた。その小さい一つの瑠璃の瞳であつた。

あな尊と青葉若葉の日の光

芭蕉はまた掌を合せて。その時若葉青葉にてりかがやく日の光のチラチラは幾千萬の神心の眼であつた。その数限りないイルミネーションに違ひなかつた。それを見てハツと驚いた芭蕉は流石にえらかつた。眞に目を開けるとそこに理屈も何も無い。あな尊とよと頭の下る事ばかりである。ただこの世界は光明に満ち溢れてゐる。

難有や柳がさんらんと光るわそつと根に腰

六一

下ろいて、さてそつと行こかの。

私のこの短唱もこの心を歌つたものに外ならぬ。ちやうど之と同じやうな事を、あの學問も何も無かつた金光教の教祖が教へてゐる。「皆の衆や、木の根に腰を下ろして休ましてもらつたら、立ちあがる時ははあ、難有うございましてと御禮申す心で行かつしやれ」と。西行も柳の涼しい木蔭を見つけて、『しばしとてこそ立ちとまりけれ』と歌つてゐる。柳を見て立ち停らうとする心、それがすでに佛心に觸れる機縁である。さうして柳の蔭に立ちとまつた

時、西行の頭にはほうふつと圓い後光がさした事であらう。

*

草木皆佛性あり。この草木の佛ごころを發見し、之を活かし、之をおのれのものとして、おのれもあらたかな菩薩行を成就した聖がある。そのお話をする。

筑後の國は山門郡清水山の觀世音はその昔行基菩薩の開基にかかり、今に到る千年以上の古刹である。この寺の

六四
縁起がまたとなく忝い。清水は水郷柳河の東三里、所謂不知火の筑紫潟、今の有明の海よりまた同じくそれ位の距離にあるが、昔はその山の麓までひたひたと海の水が寄せて夕潮朝潮の満干が限りなく美しかつたといふ。とある日の日のくれがた、この麓に舟がかりしたのがはるばると支那から還つて来た僧行基の船であつた。泊つてゐると、その向うの山の深い峽間から闇中の夜光の珠のやうに光るものがある。それは青い金色の何とも云へぬあらたかな後光であつた。ぼうつとその光が濕つた夜天に映つて、何

やらほろろうつ鳥のこゑまでが聞えるやうである。行基はあまりの畏さに船を棄てて、山へ山へと奥ふかく辿つてゆくと、その光は一本の合歡の木より放つ瞬きであつた。思はず驚いて掌を合せたが、山の幽邃さ、夜霧のなびき、大樟のほひ、谷のせせらぎ、凡てがしんしんとして尊さ限りがない。靈山靈木を生ず、この奇蹟をまのあたり拜みまつる事行基の本懐かねてより我がたづねまゐらす佛法鎮護の靈場この外にあるべからず、南無南無とその儘跪いて、ここに伽藍建立の志を立てた。隨喜の涙がとどめあへなかつ

たのである。而もその合歡の根を地から生へた儘荒く刻んで一體の觀世音菩薩の尊像と爲しまゐらせた。それ以來山は榮えて、輪奐の美、七堂伽藍のたたずまひ、年を経るに従つて世の尊仰ますます敦く、まさしく西國第一の靈場となつたのである。(因に云ふ、京の清水の御本尊はこの彫りあましの木の未で刻んだものだ。と傳へられてゐる。) さうして今もなほ内陣の奥深く齋きまつる觀世音の尊像は地から生えた儘の小さい一本の合歡の木に根に過ぎ無い。たとへ佛性ありとも誰人かこれを不思議とし、あらたかな

りと爲よう。諸々の徳圓滿具足して初めてその身菩薩なり、佛縁成就して初めて草木の靈を識るのである。

ほろろうつ山の雉子のこゑきけば父かとぞ
思ふ母かとぞ思ふ

行基菩薩のこの歌はいかにも童の心である。この歌は果してこの清水の靈山で歌つたものであるか、それは私は知らぬ。然しこの山で雉子の玩具を今もなほ賣つてゐるのを見ると、そこに何らかのなつかしい因由がありさうで

ある。

雉子の玩具、雉子ぐるまと俗に云ふ素朴な玩具、それは濃い赤と青とで染めた尾の長い、荒削りの赤松の材の玩具である。小さな車が前と後に四つついて、糸をつけて曳けばガラガラと走る。それは鋸で挽きつばなしのがさつな赤松のほひのふんぷんと生々しいものだ。中には黄色な俵を背に載せたものもある。親雉子に小さな子の雉子が負ぶさつたかはいいいのもある。

雉子ぐるまを思ふと小供の時の事が忍ばれる。晝は遊びにまぎれてもゐるが、日が暮れかかると急に父母の戀しくなつた童の心が戀しくなる。雉子ぐるま、雉子ぐるま、私もあの頃がなつかしい。私は歌ふ。

雉子ぐるま、雉子は啼かねど日もすがら父母
戀し雉子の尾ぐるま

まことに聖心は童の心を深くしたものである。童が生

の父母を慕ふ心、それはとりもなほさず聖たちの空のあな
たを慕ふ心となる。世にふたつとなき命の命、その神心佛
心の前に聖も童のやうに拜がみ恍惚、いつも心はあどけ
なく、いつもひもじく涙する。

七〇



その六・

何はおいても目の前の、殊に身ぢかなものから識る事である。何事につけても物識り顔をする人、えらさうな六づかしい論議に口角泡を飛ばす人たちも、つい目の前のたつた一本の竹でもよく識り得る人は無い。先づ其一本の竹から観てゆかなければならぬ。観る前に先づ深い愛情を持つてやらねばならぬ。愛情あつての理解である。さうして識れば識るほど愛情も深くなるものである。

*

竹は筍の伸びたものである。筍がずんずん伸びたのが竹だ。それは誰でも知つてゐる。然し、それを知らなかつた通人がある。

七四

その人はお江戸の新吉原に生れて、やはり遊女屋の御内所で何の苦勞も無く大きくなつた、むろん生えぬきの江戸つ兒である。ことに色里で育つただけ、米のなる木も御存じないが、もののあはれ、戀のいきさつ、うき世の義理人情の諸わけ、諸事萬端のやりくりといふ風なことには子供の時

から早くも馴染んで、いつともなく押しも押されぬ大籠の主人になつた。もとより大通の常として歌俳諧茶の湯、生花、その他、さまざまの遊藝一として暗からう筈がない。その風雅の道によくたけた、その風雅人がである。それはある日のこと、荏原郡は下目黒の不動様までお参り、旁走り、の筍飯を御風味とあつて、その道の宗匠はお天狗連の誰彼と、まあえつちらおつちら御出かけなすつたとおもへば間違ひない。それには例の利休茶色の頭巾に鼠の十徳、ひねりくねりの何とやらの杖を突いて、「筍や」とやつたもので

七五

ある。惜いかな、時が遅い。竹藪の中へかかると、大切の筍がひよろひよろと伸びあがつて、竹になりかけてゐる。皆さんあのそれ筍がナ、びつくりしちやいけやせんよ、筍がナ竹になりやす、へへえ、筍がと云ふと、エヘン、竹といふものは、そもそも筍からひよろひよろと來たね、へへえ、竹が、いやさ、筍は竹の子でござす。ずるぶん人を笑はせるものだ。

都の人といふものは、今でもさうであるが、田舎の事と云へば、何一つ御存じがない。筍が竹から生れることも、竹に

なるのも、此の遊女屋の御隠居が知らなかつたのに無理はないが、それでゐて、竹の匂をひねり出したり、筍やアとやらうと云ふのだから滑稽である。大通の宗匠、竹は竹、筍は筍で、全然はじめから別のもと思つてゐたのである。

*

さてまた、良寛禪師のお話になるが、面白いから、この大通と較べてみよう。良寛様があの五合庵に行ひ澄ましてゐられた頃の事である。

ある日のこと、ふと氣がつくと、何とも知らず青あをしい
 いいにほひがする。恰度坐つてゐられた膝の下で、幽かな
 何かの觸はるやうな、伸びあがる生物のけはひがする。こ
 れはと云ふので、床板をはづして見ると、案の如く筍である。
 抑へても抑へきれない力が、いきいきと、それが伸びあがつ
 て來てゐるのである。可哀相にと云ふので、その儘、自分は
 少し片寄つて、やはり經を誦んでゐられた。そのうちに日
 が暮れ夜が明け、いつとなく月日が經つ、山中曆日なしと云

ふ譬のとほり、とりわけて坐禪三昧に入つた良寛禪師のこ
 とだから、悟つたものである。飄々と恍れきつてゐられる。
 ところで筍はずんずん伸びる、だんだんと色も匂もまた流
 石に若いがいかに竹らしく生ひ長つてゆく。それをも
 いつかと忘れてゐて、ふと氣がつくと、驚いたことにはその
 竹がいよいよ眞物になつて、その草庵の屋根裏に今はつか
 へるばかりになつて、動いてゐるのである。これは可哀相
 だと云ふので、穴を開けてやるつもりだつたさうだが、その
 屋根裏にちよいと火をつけてやつた。ところが穴はあい

たか知れぬが、草庵がおかげですつかり火になつて了つた。
と云ふ話であるが、おしまひの火をつけた一件だけは、どう
も假構らしい。それでは却つて禪師の悟りが小さくなる。
兎に角、その筍がいつのまにか屋根を突き抜けて了つたと
いふ一説が、おほまかで、いかにも良寛様の庵らしい。

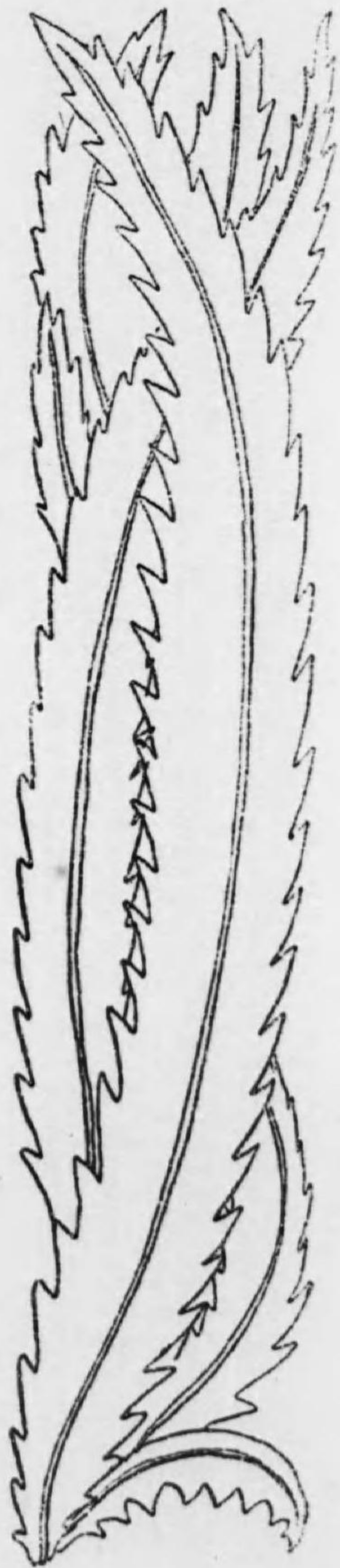
禪師は筍は竹になるといふ事はむろん知り盡してあ
れる。床板をはづしてこれは可哀相だと観る心がすでに
識り盡しての慈悲である。深い愛であり、いつも云ふ佛心

のあらはれである。可哀相だと観て、自分は片寄る心もち、
それはすでに思ふさま筍を伸ばしてやりたいといふ有難
い聖の心に外ならぬ。愛があつての理解であり、識つての
上のなさけである。

松の句は松に習へ、竹の句は竹に習へといふのもこの
事である。

一本の竹の事を識らずに歌が作れるわけは無い。

.HSON.



心の素直なことは何よりいゝことであるが、それだけで
歌が詠めるといふわけは無い。まさしく玉のやうな童の
心は萬づの歌の心の源である。ではあるが、歌は歌である、
でなければ心が素直でさへあれば誰にでも歌はできさう
であるがさうはゆかない。

古い譬であるが、玉でさへ磨かなければ光らない。その
玉の磨きにもまたいろいろある。然し石くれでも磨けば
いくらか光りもするし、そのうちには寂びもつく。何にも

ならないといふことは無いが、よい玉でありよく磨かれたものにはかなはない。之は天稟であるからしかたがないものである。

それはよい玉があるとしても磨くには磨き方がある。それは玉を磨くものの心の持ち方ひとつで、荒つぼくもなればしみじみとした光澤も出してくる。よい玉なら磨き出しさへすればすぐに光つてくる。然し、まだまだ外面だけの光である。外面だけの光を出すまでではまだまだで

ある。きらきら光るばかりでもいけない。奥底からのほんたうの底光が澄んで來なければほんたうの光だとは云へないものだ。夫が年を経るにつれて滋味がつく寂がつく、一寸見には玉だか石くれだかわからなくなる。そこまですゆかなければほんたうだとは云へない。

丹念に磨くことである。磨きあげることである。そのうちには安らかなゆつたりとした息づかひで靜かに、その人の息づかひそのままに磨かれてくる。さうしていつま

でもその調子で續けてゆかれるものである。焦燥つたり
 騒いだり、わめいたり、いやけがさしたり固くなつたり、いこ
 ぢになつたりするうちには、いかほどよい玉であつても決して
 ほんたうのよい光を出せる筈はない。

玉を磨いてゐながらも、おしまひには我を忘れて磨いて
 あるといふ風に、自分と玉とが一つになつて了ふ。そこま
 でゆかなければ矢張ほんたうでない。磨手の心が澄んで
 さへくれば玉も澄んでくるし、心が寂びて滋味がついてく

るほど、玉にも寂びができ、滋味がついてくる。

これは玉ばかりでない。人がらも歌の氣品も修業次第
 で高くもなれば澄みわたつてもくる、寂びてもくる。

歌は歌である。そこにその道の尊さもあるものだ。そ
 の道に入るならその道のことをなによりも尊いものにも
 崇め學びもし、教へてももらひ、自分から深く愛しみもし、大
 切にもし、修業もし、苦しみも人一倍になつてゆくほどの

覺悟がなければ、たゞの遊びごとになつて了ふ。歌を崇めることは自分を崇めることで、歌を弄ぶことはとりもなほさず自分みづからを弄ぶことになる。

つまりは先づ歌を作るより人を作ることである。歌が詠めるほどの心をとにかくに磨きあげることである。心ばかりで無い。身體からして磨きあげる事である。

そこで心を磨くとか身體を磨きあげるといふことはど

ういふことかとなるが、かういふお話がある。

*

ある人が私のところに来て、かういふことを云つた。歌はどうしてできるかと人から訊かれたので、あつだこのあつだとい喝しましたと云ふのである。さもその人は誇らしげであつたが、それはいけない。私もハツと思へとはよく云ふことであるが、この何ごとにも童の心で鮮かに驚くといふことは元より歌を詠む機縁にはなる。然し驚き方

にも色々ある。ただあつだあつに限ると云つて納まつてゐたところで、それは禪坊主の臭みで、ともするといやみになる。ことに何にも知らない人に向つて説く言葉では無い。不親切でもある。

*

私が葛飾の眞間の亀井坊といふ廢れた古い庵寺に、ひと夏妻と二人で佗びしい住みかたしてゐた時のことである。ある闇のころであつたが、何氣なく庭に下りて籬の外に出

て見ると、そこには廢れた田圃があつて、邊の八つ手や小竹や、葛の葉の繁みに、思ひがけなく螢がちらちらしてゐた。うれしいと思つたので、出て見ないか、おい螢があるよ。と内の方へ聲をかけた。「あら。」と妻の方も驚いた聲を立てたが、そそくさと走り出して來たものだ。手には圓い白いものを持つてゐる。團扇である。私も驚いて、「その團扇はどうする。」と聲に出したが、それがやや強かつたか、妻もビクリとしたけはひで團扇を背後にかくした。かくした、そこまで氣がつけば難有い。然し人から訊かれて氣がつ

く位では何にもならない。私は妻に云つた。氣がついた
 らいいが螢がある。と聞いた。ただ飛んでくればいい。ハ
 ツと思つた。拍子に直に團扇と感じて手にするといふ風で
 は、あまりに心の修養が足りない。團扇は何のためか、むろ
 ん螢をはたき落す積りである。すると螢はたく、團扇と三
 つ一緒になつてハツと思つたのである。ことに螢に團扇
 は昔からのつきもので、提灯の繪にも商店の團扇繪にもザ
 ラにある。第一に古くさいではないか。螢と聞いて直に
 捕るといふ心を起すのも淺はかである。さういふハツで

は困つたものだ。私ならただ飛んで出る。観ようと思ふ
 ばかりで出る。それから奇麗だとか悲しいとか寂しいと
 か、哀れだとか、色や光や物かげのさまざまをもしみじみと
 観て感ずる。それはその人の心の高下にもより、悲しみの
 深さ淺さ、趣味や學問の廣さ狭さにもよる。色々に観える。
 それから歌にもなれば、詩にも、繪にもなり、言葉にもなる。

何事も平常の心がけしだいである。修業しだいである。
 平常心を尊く磨いて置くことである。而も素直に鮮かに

心から驚くことである。ハツと思ふにも思ひ方による。

九六

さうでは無いかと、私が云つたので、妻も全くさうでございまして濟みませんと頭を下げた。私に濟むも濟まないもない、あやまるなら蝨にあやまんない、私も笑ひ出した。

私の云ふのは蝨を捕るのは殺生だ、生きものは殺すものではないといふ、世のいはゆる道徳的な見方からばかりでは無い。もつと深い詩人としての心から、私の詩や歌の道

の上から來た言葉である。

*

心柄といふものはほんの一寸した言葉のはしたもあらはれるものである。

私のゐた寺の坊さんに、ある時銚子行の川蒸汽の話が出たので、此處から銚子まではよほどせうねと、訊くと、いやたいした賃錢でもありませんと坊さんが答へた。私は里

九七

數を訊いたのに、坊さんはたいへんなことを答へたものである。坊さんはこの一言で、飛んでもない俗僧であることを私に知らしめて了つた。

だから、その後、その坊さんが田圃の蛙が鳴いたら石油をぶつかけなさいと云つて呉れた親切な言葉にも、私はさほどに驚きはしなかつたのである。

古池や蛙飛び込む水の音

たいへんな違ひではないか。

*

また、ある時、ある三人の男が膝を交へて坐つてゐた。その時バナナをお盆に山ほど女中が持つて來た。そのバナナはまだ青かつた。これを見た瞬間に、一人が、はあいいなといつた。一人は、だめぢやないか、青いなと云つた。一人は、全く小笠原のは値ばかり高くてねと云つた。三人とも親しい友達だつたが、一人は畫家で、一人は商人、あとの一人はその珈琲店の主人だつた。畫家は其時色のかがやきを觀

た。商人は味を感じた。そして其店の主人公は値を考へていつしよにハツと思つたのである。この中の誰の心がいちばん尊く磨かれてゐたか。

畫家はむろん輝いた青い色を観たばかりではあるまい。その輝きの底に潜むバナナの生きた命そのものをも観とほしたにちがひない。

*

また、かういふことがあつた。

ある歌自慢の人が、真間にたづねて来て、私に歌を見てくださいと云つた。大概かういふ人の見てくれは教へてくれといふのではない。驚いてくれ、褒めてくれといふのである。私はさういふ人の心もちをよくわかつてゐるし、ほどほどにしてゐる。かういふのはいけないのだと云つたところで、のぼせてゐるのでわからう筈はなし、先方でほんとに教はりたといふ遜だつた心が無い以上私の方でもムキになつてやりこめる必要は無い。なるべくせいぜい批評の

水準線を低めて、少しでもいいところがあれば、それを見てやつて、まあ結構ですぐらゐにして了解。でなければ第一私の時間が役にも立たぬ事でつぶれて了解した、もう頭を下げて一時も早く歸して了解方がよい。何を云つたつて、お天狗さんにはわからないのだから、ひとりでに歌の六つかしさに恐れ入つて、はじめて顔を赤くする時節を待つてやるよりほかはない。獨であつて、自分の歌に顔が赤くなければしめたものである。

そこで、その人もさういふ人だと直ぐに見て取つたので、まあ散歩でもして見ようと一緒の外に連れ出したものだ。歌の自慢なぞ聞くより、外へ出て雲でも見た方がどれだけせいせいするか知れない。どうせ時間をつぶすならその方がよい。その人は途みちも何かしら喋舌くつてゐたやうだが、私は夕方の方の空や、田圃の景色にばかり眺め入つてゐたのである。

まだ赤い夕焼が西の空には残つてゐた。眞間の小川の

土堤の上を歩いてゐると、ふとその人がしやがんで小石を拾つた。何をするのかと見ると、何といふ可憐な繪模様だつたらう。私は思はず立ちどまつて了つた。

其處には鮮かな裏白の葉の河楊が水の面に揺れてゐた。其撓んで揺れ動いてゐる一つの枝にはまだ小さな燕の子が一羽留つてゐた。又一羽來た。枝はいよいよ揺れる。枝の先は水へついて波を立ててゐる。燕の子達は紅い頬を揃へてさもさも恐ろしさうに啼き立てる。又一羽留る

と枝はいよいよ揺れ出した、ともすると滑り落ちさうになるので、今は必死となつて縋りついてゐる。そのつやつやした黒い裂羽、いたいげな啼き聲。それだけでも可哀いのに、また一羽、一羽たいてついでに近くまではやつてくるが、枝の上の燕の子はそれを見て、慌てて、いけないいけないと啼く、これ以上留つては枝がすつかり水につかつて了ふのである。空の一羽は留るには留られず寂しさうに啼きながら翔つては近より、近よつてはまた翔り出す。

その燕に向つて小石を投げたのである。

一〇六

私はハツとしたが、それでも黙つてゐた。寂しい氣持で微笑みながら、私はまた何氣なく歩みを續けた。さうしてあるところまでその人を送つて行つてから、左様なら、またお出でなさいと別れの握手をした。それで歌はたうとう見ずじまひである。見なくとも、もうどれだけの歌かわかつて了つたのである。むろん、どれだけの歌を作る人かもわかつてゐる。

何故か

それはその一事でその人の人柄がまだできてゐないといふのがハツキリと私にわかつて了つたからである。「心」ができないければ歌はできない。

少しでも心の修業、ことにこの道の修業が積んだ人なら、また少しでも繪心や音楽の事がわかる人なら、夕焼の空にまづ心ひかれる。眞間の小川の薄明りにまづ心をそそら

一〇七

れる。その薄明りの中に河楊が揺れてゐる。揺るる小枝に心も揺れる。揺るる小枝は燕の子が動かしてゐる。燕の子も動いてゐる。啼いてゐる、しがみついている。これだけでも生きた燕の生を感じず、事ができる。小さな燕にも大自然の生が揺れに揺れてゐる。繪の方から見ても、黒と頬紅と、白と緑の葉と、撓んだ枝と水の色と夕焼と、之だけでも立派なものである。音楽の方から云つても、何ものにも微妙なリズムのあらはれがある。みんな動いてゐる。さまざまに強く弱くゆらいでゐる。それに一羽來二羽來、空にも

一羽留りもやらず翔つてゐる。あはれは益々ふかく益々揺れるばかりである。観た眼から云つても三羽すり寄つてしがみつく姿はいい。近よりかけて枝が揺れるのに驚く燕の形もいい。それらの動くリズムも愈々こまやかになるほどいい。燕の「心」其もの「生」そのものを深く観て、その「心」を自分の「心」とし、その「生」を自分の「生」とおんなじに観る、私達の突きつめた観照からも、それは立派な象徴の詩や歌そのものである。

これだけの事は、一寸見た瞬間に、凡てが自分の頭に這入つて来るべき筈である。眼で見、耳で聴くだけはまだしも、靈ぜんたいでハツと感^{かん}じる位^{くらゐ}でなければ、歌や詩はできないものである。

その人はハツとは思つたが小石を投げた。

人間ができてゐない。詩人として修業が積むでゐない。歌などは見なくともわかつてる。吳々も云ふが、これは人

間は萬物の靈長である、それで哀れな鳥や小蟲をいぢめてはいけないと云ふやうな小學校のお修身や、生わか^{なま}い耶蘇^{イエス}の教師や、抹香^{まつかう}くさい佛のお説教の心もちばかりでは無い。自分の道とするところから、もそつと深く美しくしい心もちでいふのである。

ところでその人は小石を投げた。みすみす淺はかな事だと知りながら何故にまた私が、それを咎めたり説き諭したりしなかつたといふ事であるが、云つたところでわかり

さうにもなく、云へば云ふほどうるさくなる。何かと口答へする。それに晚餐前ではあるし、仕事もせねばならぬ。人としての深い關係が無いかぎり訊かれもせぬ事を知つたかぶりするにも當るまい。先づまづ知らぬ顔して微笑してゐた方が一刻も早く別れられる。不親切のやうであるが、強ひて私は説教者にはなりたくはない。佛も縁なき衆生は度し難しと曰はれた。

*

次に身體からして磨き上げるといふ事はどういふことか改めてお話ししたい。

七の八・



昔の武藝者は霜のふる聲にも目を覺ましたと云ふが、それは恐ろしい位張りつめた「心」そのもので感ずるので、單に耳だけで聽いてゐるのでは無い。身體ぜんたいが耳になり、身體ぜんたいに満ちわたつた精神力そのもので感ずるのである。これくらゐ隙が無くなればしめたものだ。

然しそれにしても初めは矢張り耳から入つてくるのであるから、兎に角耳から鍛へ抜かないと云ふと、それほど澄み入るわけにはゆかない。

譬へば醫者が病人の胸の上から指さきでといんといんと打つ。あれなぞも耳だけで音ばかりを聴いてるわけでは無い。そこは熟練で音を聴くといふより直覺である。指さきがその場合耳になつてゐる。身體ぜんたいが耳になつてゐる。心が耳になつてゐる。

もつときはどい話になると、よく太刀風三寸にして身を交すといふ。眞つ暗がり以後からサツと來る、ハツと思つ

た瞬間に名人ならばひよいと交す、これは耳で識るのでは無い、身體ぜんたいの直覺でハツと悟るのである。そこまでゆくと全く身體は鍊へぬいてある。

それがなかなかの事であつて、生半可の修業者には滅多にできる話では無い。

たとへ、一寸とした試合にせよ。對者の隙をハツと識つて打ち込むといふことは智慧や眼や耳のはたらきばかり

のできるわけはない。鍛へぬいた身體ぜんたいの直覺から來るのである。それは柔道の手にしたところで、ただむきに固くなつて、引いたり押ししたり、對者の隙ばかり狙つたり考へたりするのはまだほんの初心ださうである。自然にまかして軽く對者と動いてゐるうちにハツと隙を識る。それは全く熟練の效で、その間隙をも入れぬ電光石火の早業は、ほとんど直覺そのものであるといふ、何ともたとへやうもない。考へたつて考へでできるわけのものでは無い。

*

武藝の話ではよく聞く事であるが、宮本二天立心と小倉の離れ小島で真劍の試合(あれは敵討では無いさうである。)をして斃れた佐々木岸流の得意の一と手は燕返しつばめがへの術じゆつといふのださうな。その燕返しつばめがへの術を編み出した機縁きえんが面白い。

岸流が諸國を遍歴して筑後の柳河に來た。何か自分獨

一三三
特の一と手を編み出したといふ心願で、何につけても心をくばる武藝修業の事であるから、寸時の油断も無い。今はほとほと精根を疲らして了つて、とある河邊の柳のほとりにぐつたりと腰を掛けてゐた。柳河といふところは私の故郷であるが、その名の通りに柳が随分と多い。空は青と晴れ亘つてゐたが、非常に風の吹く日で、どの柳もどの枝も非常に揺れる。と、その揺れに揺れてゐる柳の枝へ燕が矢のやうに羽風を切つて飛んでくるかと思ふとピタリと留つて、枝といつしよに揺れてゐる。また一羽來る。よ

くよくよく観ると、燕は鋭い、燕は風の隙間を狙つて、柳が揺れに揺れて、ほんの一寸、靜まる刹那、すなはち動から靜に移るその瞬間に、翼を返してピタリと留るのである。どんな激しい風にも合間はある。それは人間が息を吐くのとおんなじだ。その隙である。それを燕は翼や身體や眼や耳やで充分に知り盡してゐる。直覺といふよりも寧靈覺と云つていいくらの早業である。その燕の氣合や形でここだと膝をうつた岸流はえらいものである。

これは私自身の話である。

*

葛飾は三谷の紫煙草舎にゐた時のことであるが、恰度五月雨のころで、しとしとと雨は朝から晩まで日がないちになり降りそそいでゐた。徒然なあまりに静かに机の前に端居して、その雨の音を聴いてゐると、はじめはただ雨の音だと聴いてゐただけであつたが、しだいに心が澄んで來ると、

それがいろいろな雨の音になつて來る。百日紅の葉にふる雨、しだれ柳や松の葉にふる雨、古池の面にふる雨、池のほとりの薪真菰にふる雨、青い蜜柑の葉にふる雨、垣根の破れた葎簀にふる雨、屋根の萱や瓦にふる雨、朽ちた庇から滴る雨、垂または樋を傳つて落ちる雨水の音、庭石や地面や、濕つた苔の間に泌みこむ雨、さういふのが一つ一つにちがつた音を立ててゐる。それがいつしよに音を立てる。

その中からである。私は松の葉にふる雨の音ばかりを

聴きわけの事ができるかどうかを試して見た。なかなかである。毎日坐つて聴き惚れてゐるうちに、それが不思議にも、しだいにわかるやうになつて來た。さうして、幾日かの後には、愈々松の葉にふる雨の音ばかりが、しんみりと澄みに澄んだ耳に入つて來た。これなども耳から入つて「心」に達したのである。

身體を鍛へるといふ事も、つまりは「心」を磨きあげることである。つまりは「心」である。俗に心眼とか心耳とかいふ

ものも、この鍊ひあげた極致のはたらきを云つたものである。

*

藝道の極意に達したほどの名人は、流石にみんな違つてゐる。話が耳のことばかりになるが、序だから心耳といふものがどういふものか、一つ二つ話したい。

私の郷里に大さんといふ盲人の琴の師匠がある。琴に

かけては永年の修業で今は全く名手と云つていい。その盲人は、いつも粗末な荒壁のままの床の上に圓胴の小さな太鼓をたつた一つ置いて、それを背後に、いつもほればれと坐つてゐる。太鼓の音に聴き入つてゐるのである。心の耳が澄んで來ると叩かぬ太鼓の音までもきこえて來るといふのである。

そこまで達した大さんは實にえらい。これは一つには琴の方で音といふ音を聴くことに修練しぬいたお蔭であ

る。三昧に入つてゐる。

*

もう一つのお話は、九州の喜多流の謠曲の名家で大友枝翁(今の友枝さんの先代である)のことである。

ある時、その流の大家達ばかりが集つて、お能の催しがあつた。能と云へば太鼓、小鼓、大鼓、笛、地謠、シテ、ワキ、ツレとかう揃つたところ、その一番が成立つものであるが、さて取

りかかつて納める迄は可なりの時間がある。この時の
 可なりの永ものだつたと云ふが、いよいよおしまひになつ
 て囃子も舞もいよいよ納めて了つたところで、どうしたも
 のか地の方だけが一文だけあまつた。これはをかしい
 と思つて、みんながみんな寄り集つて考へて見たがどうに
 もさうなる原因がわからない。すると翁は石龕のことで
 あるから傍でちつと観てゐただけであるが、それはどこの
 どの拍子で、小鼓のどの手が一手落ちたからだと云ひきつ
 たさうである。云れて見れば全くさうに違ひない。そこ

で、流石の大家達も非常に驚いて、恐れ入つて了つたと云ふ
 ことである。

これなども眼で観てゐただけでわかる筈は無_い。全_く
 心耳で直覺したのである。靈で聽いて識つたのである。

*

ところで話がをかしくなるが、ここに私の妻の實家に養
 はれてゐた庄九郎爺といふ風來坊がゐた。この庄九郎爺

生れつきの風來坊で百姓するでなし、唯ふうらりふうらりと遊びほけてばかりゐるので、家はとられる、お嫁さんには逃げられる、たまに村のお祭に油揚の店を出してもいつも眠りこけてゐるので、大切の油揚は鳶や烏に食べられて了ふ。つまりが目白の二羽入つた目白籠と淨瑠璃本一と擁へ、抱いて来て御厄介になると、そのまゝ、永の九年間といふもの坐りこんで了つた。この風來坊面白くことにはいつもコツクリコツクリ眠りこけてばかりゐる。まるで晝と夜とを取り違へたやうな男で、晝間は眠りこけてばかり、流

石に目白をさす時や淨瑠璃を語る時だけは一寸目が冴えるさうだが、その外は坐つては眠り、時には干瓢をダラリと一尺あまりも口から垂れさげたままぐウグウとやる。少お目出度い方だが、不思議な事には夜は非常に耳が冴える、カタリと云つても覺め、髪の毛ひとつ落ちてても覺め、どんなに眠つてゐても庄九郎と云へば、へえいと返事をする。それは實に目が敏い、まるで犬のやうに敏い。これで盜賊の用心、火の用心、夜あそびの見張りには充分なる。だから晝の中は寝たいはうだいに寝かして、夜だけ番犬の代りを

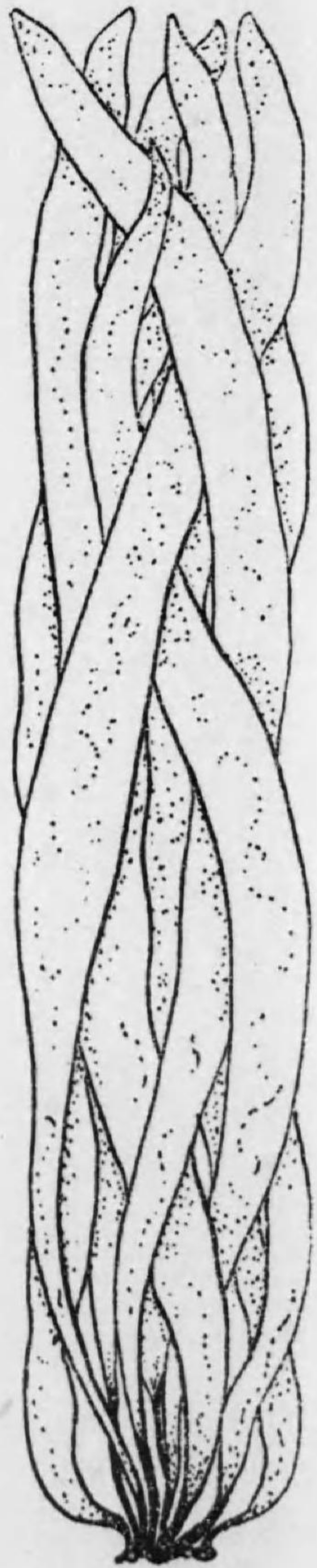
やらせる。何が役に立つかわからない。

この風來爺ふうらいぢ生れついて耳みみが敏といにもよるが矢やつ張はり修しゆ練れんの結果、耳みみばかりが針はりのやうに鋭とどくなつたのである。と
ころで、耳みみばかりがどれほど達者たつしやになつたといふ條、かんじ
んの靈たましひが空虛うつろであるから何なんににもならない。

「心こころ」を通じて耳みみで聽きく、耳みみを通じて心こころで聽きく、そこまで何なんかの
道みちから鍛きたひあげ、磨みがきぬかなければ、犬いぬや猫ねこや蠻人ばんじんに等ひとしい。

私わたしたちは詩歌しうかの道みちから身からだ體たいを磨みがき靈たましひを磨みがきぬくのであ
る。

その丸



麝香の鑑定をする支那人のお話がおもしろい。

それは神業に近い、ほとほと妙諦に入つてゐるのである。一體麝香といふものは麝香獸の臍に入つてゐるのでその入つたままの臍のふくろを圓く刳り抜いて麝香商のところへ賣りに來る。それが非常に高價なところから、賣る方でも此頃はよいよ狡猾くなつて、臍の中に鉛を入れて知らぬ顔で持つて來るといふのである。その鉛の入れ方もいよいよ巧妙になつて來て、ただ秤にかけただけではその重

さと言ひ、匂ひといひ、色つやと云ひ、正真正銘の麝香と寸分も見わけがつかない。そこで麝香商の店にもその鑑定をする男を一人必ず雇入れてあるさうである。その鑑定の仕方が又悠長なものである。その男は一方の掌の上に本ものの麝香をのせ、一方の掌に新らしいのを載せると兩掌を互みがはりにゆつくりと上げ下げしてゐる。ただそれだけで、その兩方の重さを掌の中で上げ下げしながら量つてゐる。さうしてそれが本物かいかさま物か愈々どちらかわかるまでは一時間でも二時間でも、半日でも兩掌をた

だ上げ下げして居る。

時とすると、掌の上の麝香を入れ換へて見たり、また元の掌に移して見たりしてはただ上げ下げしてゐる。全く氣の永い話であるがそれでチャーンとわかつて了ふから驚く。そこで愈々怪しいと極めて了ふ、といきなり鋭い小刀を執つて、ぐいと臍の中へ突つ込んできりきりと割ると、ボンと鉛を放り出して了ふ。その鑑定がまた千に一つの外れはないと云ふのだから猶さら驚くのである。

その掌の上の觸感の微妙繊細な事は、ただそれ丈けばかりを鍛へ抜いたお蔭とは云へ、全く技神に入ると云つていい。驚くべき一種の靈覺である。

由來支那人と云へば流石に大陸の人間だけあつて萬づ大まかで、如何にもものろくさしてゐるが、その専門的な事にかけると、全く小賢しい日本人などの思ひも寄らぬ妙藝を發揮する。これは專に鍛鍊の結果で、何事もそのねんばり

強い執着と大愚に近いまでの氣永な修道心から、遂には人間以上の不可思議力にまで達して了ふ。

金銀の鑑定などもそれは鋭いものだと云ふ。それなども掌の上に金貨銀貨いつぱいに取りまぜて載せるとその五本の指さきから一つづつ面白いほど迅く落してゆく。右手には細い一尺ばかりの鐵火箸やうのものを持つて一つ一つ落ちかかるところを、怪しいと見るとチーンと弾き飛ばして了ふ。それも千に一つの間違も無いと云ふのだ

から驚く。これなどは全く指さきの感じから落ちかかる
すぐ直覺して了ふのである。

それでをかしい事にはさういふ麝香や金銀の鑑定をす
る男は、ただそれだけのもので、世の中の事も知らなければ、
何一つ出来ないで、その事以外はただのろのろと遊びほう
けてゐるばかりだといふ話である。ただ一日中御馳走を
たべて掌を上げ下げしたり、鐵の棒でチーンとやる丈ださ
うである。

*

九州へ旅した事のある人が、何かの話のついでに、あちら
の女はえらいものだと思嘆するのを聞いた。それはどう
いふ譯かと云ふに、九州の女はお銚子に觸つただけで中
は酒がどれぐらゐ入つてゐると云ふ事がチヤーンとわか
つてゐる。それに較べると北國の女などはお銚子を耳の
ところまで持つて行つて思ひきり振つて見なければわか
らないのだから困る、愚鈍なものだと眉を顰めてゐた。

料理屋の女中なども、刷れた事にはなかなか目はしがきく、耳が聴い。

私がある時、割箸を割り損ねてボキリと音を立てた。それは傍に居る人でも気がつかないくらい、幽かな一寸した音に過ぎなかつた。それに驚いた事にはもう座を立つて、次の部屋の梯子段のところまで下つて行つた女がハツと向き直ると、御箸が折れましたの相すみません、今すぐに

持つてまゐりますと云つた。それは細かなものである。

*

人は目に物を見ながら頭に入れてゐない事が多い。

私が筋肉炎の爲めに可なりなひどい手術を受けて、永い事ある下町の病院に入つてゐた時の事である。窓の前の中庭には檜の木と横の木とが二本あつて、その間に青い物乾棹が一本掛けわたしてあつた。いつもその方ばかり眺

めてゐたので、それが目につかなかつたわけは無い。それが驚いたことには五十日あまりといふもの全く頭の中に入つてゐなかつたのである。或る日、雨がビシヨビシヨ降つて、非常に陰氣な午後があつた。背中の創の痕がその日は取り分けてきりきり痛む。ああ痛い、痛い、ああ痛い、ああああと、思つて庭の方を見てゐるうちに、その青い棹がハツキリと目に見えて來た。おや、あんな竹棹があつたのかと思つて私は思はず目を瞠つたが、五十日の餘もそれを見てゐながら少しも氣がつかかなかつた自分の迂闊さ加減には

猶更吃驚して了つたのである。情ない事だと思ふ。つい目と鼻との間だ。いつも目に入つてゐたには違ひない。それが見えなかつたのは靈に入つてゐなかつた。かんじんの頭がだらけきつてゐたからである。身體がきりきり痛むので靈が痛む。鋭くなる。そのはづみに目に入つた。そこで、やつと靈に焙きつけられたのである。青い棹が一本だ。

私達はいつとも目に見たものをいつとも目ばかりでなく、靈

に徹して、その靈の眼で確乎と見据ゑるだけの引き締つた
 心で終始したいものである。名人は瞬かす、そこに隙が一
 つあつてもいけないのである。

阿古屋の貝が病氣をすれば眞珠が生れる。人も眞實に
 患へば詩や歌を生む。要するに人間の靈はいつも苦しみ
 と患ひ通しの中にきりきりと痛んでゐなければ決して磨
 かれはせぬのである。また何事につけてもその痛さを痛
 切に感じ得る靈でなければいい靈だとは言はれない。

*

かうした時には雀もありがたい。

ある時私が住んでゐた二階の窓の向うに木槿の垣根が
 あつた。毎朝白い木槿の花は開いてゐたが私は毎朝それ
 を眺めてゐながら、さのみ心にはとめてゐなかつた。

ある日、何気なく眺めてゐると雀がはらはらと一羽飛ん

で来た。すると木槿の枝に来て留らうとした雀が、どうしたものか、ついとそれて了つた。枝が動いてゐたのである。私もハツと氣がつくと、枝と一緒に白い木槿の花もしみじみと動いてゐたのを観た。ひどくは揺れてゐなかつたが、しみじみと動いてゐた。風があるなと私は思った。雀の機縁で初めて私の靈もハツと眼が覺めたのである。さうして、私も心からその白い木槿の花のいのちを、絶えず風に動いてゐるものの悲しい命を識つた。それからほんたうに白い木槿の花をあはれたと私の靈の眼の底に焙きつけ

て了つた。

歌ごころがしぜんと生れて来た。

729+



大河の前に無邪氣な子供たちが遊んでゐる。大きな波が来ると逃げ波が白く捲き返して壊れるとすうと白い泡がぶくぶく白い砂濱を迂りあがつて来る。それが面白いので逃げたり追つかけてたりして遊んでゐる。どうかすると、逃げおくれてそのまま捲き込まれて見えず了ひになることがある。親たちの悲嘆はもとよりであるが、無邪氣な子供のたはむれであるだけに思ふと涙がこぼれおちるのである。これ位身に染みることはないが、時とすると分別盛りの大人までも捲き込まれて了ふ。

この夏には小田原の濱でも、子供が二人に大人が一人さうした恐ろしい波の爲に引き込まれて了つた。それを聞いて、ある年とつた漁師の一人が私にかういふ話をした。

だから危ねえといふんだよ。誰でも大けえ波だと逃げあがるくせに小せえ波だと莫迦にしやがるからいけねえ。第一波の厚さちふものを見なけりやなんねえだ、つまり波の幅だあね。ほうれ見てゐるよ、あんな大けえ波でも淺え

波があるだし、あんな小せえ波でも、ほれあんなに分の厚い波があるだつぺい。何でもねえやうに見えて、この分の厚い波くれえおつかねえものはねえ、いくら景氣ばかり素晴しくつたつて幅も何もねえ波だと、すうともざあとも上つて來やしねえから大丈夫だ。だからよ、俺たちはうめえもんだよ、沖から歸つてな、ずつと舟を上げやうと思ふてえと、何でも濱近くまで漕いで來て、じつと分の厚い波が來るまで待つてるだね、やつて來る、それつと乗つかる、ざざざざざと一思に上つて了ふ、この呼吸がかんじんだよ。みんなは

あ、何にも知らねえもんだから、小せえ波だと莫迦にしやがつて、逃げも走りもしねえ、おつかねえこつた。波でも表面ばかり見てちやいけねえ、底の厚さを見なけりや駄目だよ。私もそれを聞いて、成程と心からうなづいた。

この裏を行つた話では波の荒々しく立ち騒ぐ姿を見てこの瀬は浅いと見て容易く渡り了した人があつた。浅瀬の波はいくら激しく見えても底が浅い。波は立たぬが瀬んだ水ほど恐ろしいものはない、其れは必ず深い、底知れず

の淵である。

*

ある漁師の一人がまたかういふことを私に話した。

魚は海でとれるでねえ、山でとれるだ。

そんな莫迦なことがあるかつてだから陸の奴ら盲目だつてことよ。

魚だつて人間だつて、生物には違ひはねえだ、だからよ人間ばかりが伶俐だと思ふと大間違だはあ、魚だつて何だつてみんなおんなじよ。

陸の奴ら、陸にばかり山があつたり河があつたり野つ原があつたり、自の世界ばかりが極樂世界だと思つてけつかる。海にも山もあるし河もあるしよ、谿底もあれば里もあるだよ。それ知らねえで漁師に魚がとれるか聞いてくる。

ろ。

第一人間だつて高い山のてつぺんでは住はれめえ、魚だつておんなじよ、魚だつて波風の立たねえお里が戀しいだ、だから大概魚の住んでるとこは極つてるだ、深い狭間の中だよ、先祖代々安樂に暮してるだ。だからよ、この村には鰯が住んであれば隣村には鱈が住んでるちふ風だ、ちやんと住場住場も極つてらあな。それを知らねえでは魚がとれねえ。

ところで、どういふところに深い峽間があるかつてことよ。何でもね陸に高い山があれば、その下の海には深い谿がある。低い小山があれば浅い谿がある。それ知んねぢあだめだよ。いいかね、だから俺たちは陸の山ばかり見て漕いでくだ、魚とらうと思ふなら海ばかり見てるちや何にもとれねえ、山を見てなくちやいけねえ、だから漁師は山を見て魚をとるだ。

それを聞いて私も成程と心からうなづいた。するとまた、漁師がからからと笑つて、かういふ事を附け加へた。

ところで、あの鱒だがね、あいつばつかしはしやうがねえ、年が年中ほつつきやがつて、何處にどうしてゐるともわかりやしねえ、人間なら、だらしのねえ渡り者だあね。

大正十年七月十四日印刷
大正十年七月廿一日發行



「洗心雜話」
定價壹圓八拾錢

著者 北原白秋

東京市神田區中猿樂町十五番地
合資會社アルス代表者

發行者 北原鐵雄

東京市神田區中猿樂町十五番地

發行者 鈴木泉藏

東京市京橋區弓町二十五番地

印刷者 高橋郁

東京市京橋區弓町二十五番地

印刷所 三協印刷株式會社

東京市神田區中猿樂町十五番地

發行所

合資會社

ア

ル

ス

振替東京二四八八八番
電話九段二一六九番

白秋詩集 第一卷

全二卷 第一卷 定價 十八錢 送料 二錢

白秋氏の全詩を盛れる六百有餘の燦然たる美本

明治大正の詩歌を代表する巨匠白秋氏の全詩集成。本書第一卷は青燈集、赤い鳥小鳥、大悲集、畑の祭、雪と花火の五集三十二章總詩數實に參百有餘篇を收むるものにして、未發表の近作全部を包含するもの也。純情涙を流すべき小唄あり、輕快歌ふべき俗謡あり、天真自ら成せる童謡あり、法悦光明の歡樂境地を歌へる短唱小曲あり、幽玄深遠なる象徴詩あり、印象の筆觸鮮らしき景物詩あり、自由奔放なる散文詩體あり、各種の詩風交錯して燦然絢爛會て見ざるの壯觀を呈し、渾然美妙の一大交響樂を形成す。本書は實に新鑄ポイント活字を以てせる六百餘頁の彪然たる大詩集にして、恩地孝四郎氏の装帧及扉畫眞に清麗高雅藝術の士の愛誦すべきもの、書架に傳ふべきもの、本書を措いて何を他に求めんや。

中判箱入美本——恩地孝四郎氏装帧

定價 圓八拾錢 送料 貳錢

白秋詩集 第二卷

日本詩壇に永遠不滅の光輝を放つ白秋氏の全詩集愈完成す。

第二卷成る。本卷收むる處、象徴の秘奥、官能の極致、アプサンの芳香を偲ぶべき『邪宗門』純情涙を流して歌ふべき抒情小曲集『思ひ出』及氏が一舉にして詩壇に名聲を贏ち得たる大長篇詩、林下の默想、全都覺醒賦、春海夢路、繪草紙店を始めとして才華爛漫たる少年時代の諸篇を收むるもの也。日本詩壇永遠不滅の金字塔たるべき白秋氏の全詩集は本集第二卷を以つて一先づ現在に至る全作品を網羅し茲に第一期の完成を告げたり。

定價 圓八拾錢 送料 八錢

白秋小唄集

北原白秋氏著

小唄二百餘篇。燦爛寶玉の如き歌集

雨はふる、ふる、城ヶ島の磯に
利休鼠の雨がふる。

雨は眞珠か、夜明の霧か、
それともわたしの忍び泣き

(城ヶ島の雨の一節)

歌ひ易く解し易く愛誦措く
能はざる小唄二百餘篇を収

む

附録「さすらひの唄」「酒場
の唄」「こん度生れたら」「カ
ルメンの唄」「山の唄」「別
れの唄」本文二度刷、表紙
サラセン模倣絹縞子表紙袖
珍判箱入

定価 圓十八 送料 六 銀

好評噴々忽十版。日本詩壇の聖書

わすれなれさ 小抒情詩

北原白秋氏著

斯の如く美しく、優しく、懐しき詩集他にありや

なわすれぐさ

面帕めんぱのうしろに見えて、

その眸ひとみにほふごとくも、

空いろに透すきて、葉かげに

今日も咲く、なわすれの花

本書はその美しき、懐しき
讀めば涙も溢れ出づべき白
秋氏の抒情小曲を収めたも
のである。装幀は山本鼎氏
白金の光澤美しき絹縞子に
クロバーと螢の模様をあら
はした瀟洒清新の趣は見る
からに心躍るばかりである

定価 圓十八 送料 八 銀

忽十版。眩目燦爛たる美装

玉眼のぼんと 繪入童謡

著 氏 秋 白 原 北

矢部季氏装幀及畫

清水良雄氏畫
初山滋氏畫

全國を風靡せる白秋氏の童謡集が出来ました。子供が手を叩き足を跳らして喜んで歌ふ唄はこれです。日本が上下三千年を費してやうやくただ一人生み得たる文字通りの最初の民謡詩人の傑作として永久に傳へらるべき製作はこれです。殊に本書の詩とすべきは装幀に挿畫に最善の華麗をつくしたことで童謡一篇ごとに燦然たる色刷の挿畫を一葉づつ附してあります。

原色版、色刷挿畫二十八葉。忽五版

定價 圓九拾錢 送料 拾錢

501
109

終